



2023.3.11 (土) 10:00-12:00 13:30-15:30 -12 (日) 10:00-12:00 13:30-15:30

対象：一般、本学教職員、学生 開催形式：ウェビナーによるオンライン開催(要事前登録)
定員：2800人(各分科会ごと) 参加費：無料(要事前申込み)

一員で
あると
いうこと



© Naoki Ishikawa

Member

未来の人類研究センターメンバー

伊藤 亜紗 教授、芸術、センター長

利他に関してよく出る話題に「電車でお年寄りに席をゆずるべきか迷う」があります。確かに、せつかくゆずったのに座ってもらえないと、気を悪くしたかなど不安になるのも分かります。でも、利他的な社会にとって一番重要なのは、「受け取らない自由」ではないかと思えます。『ぼけと利他』の共著者である村瀬孝生さんが教えてくれたのは、こちらの目論見のってくださらないお年寄りがいることの、風通しのよさでした。受け取られようが受け取られまいが、自分にその気があるなら気分良く与える。そうやってもれ出させたものを、必要な人が必要なだけ受け取る。そんな関係に利他が宿るように思います。



北村 匡平 准教授、表象文化論、利他プロジェクトリーダー

利他の研究にたずさわって2年目、コロナ社会の中で少しずつフィールドワークに行けるようになりました。遊具を媒介にした子供のコミュニケーションを観察するために公園や幼稚園に訪れるなかで、ぼけは人間の視点よりも、空間・環境(アーキテクチャー)のことを考えてきたように思います。われわれの生活は人間だけで営まれているものではありません。自然や動物、人工物などさまざまな生命やモノとのネットワークの中で生きています。利他を「与え手」から「受け手」へと届けられる贈与のモデルではなく、利他が生成する空間・環境について、モノの利他の可能性について、利他学会議を通して考えてみたいと思います。

ヒュー・デフェランティ 教授、音楽学、日本音楽史

... writes about music, primarily as manifested in "Japan", past and present, and among the "Japanese" historical diaspora in Australia. At the FHRC this year he has addressed music as a medium for connection and disconnection, communality and solitude. His work with Kyushu biwa singers, investigation of music among interwar Hanshin region ethnic minorities, and group-based research on music-making of diverse minorities in Tokyo as well as prewar emigrants from Japan all point toward the fundamentally "preservational" functions of music as a tool for social cohesion and conviviality, perhaps manifesting or nurturing *rita*. Conversely he recognises "anti-rita" potentiality in essentialist claims about folk or traditional music and ethnic distinctiveness, and in much music since the Romantic-era framing of composer-authors as inspired creators whose inviolable works speak directly to individual listening subjects.



木内 久美子 准教授、比較文学

今年度のセンターの活動のひとつだった「モノ利他プロジェクト」、また都市研究会の公開シンポジウムで扱った「都市の自然」といったテーマに共通していた方向性は、利他を人間社会のコンテクストの外部へと接続することだったように思います。利他的な関係性が見いだされることで、人間と事物、人間と自然、有機物と無機物の境界が、分断するものとしてではなく、接続させるものとして立ちあがる。その「見出し」の連続は、私たちと環境との関係を更新させてくれると同時に、人間とは何か、また何に動かされているのか、といった問いへの新たなアプローチを与えてくれるようにも感じています。

河村 彩 助教、ロシア文化、近現代美術、表象文化論

私は美術やデザインを専門に研究していますが、これらは利他と深いつながりがあるとつくづく感じます。デザインは使う人や制作物を取り巻く環境を第一に考えて行われる行為です。一方芸術制作は、作家の自己表現という利己的行為に見えますが、芸術作品は見る人に心地良さを与え、ときには人生を変えてしまうような強い影響を及ぼします。つまりデザインにも芸術にもそれぞれ異なる利他が存在します。そして両者に共通するのは、必ず受け取る他者がいること、そして物によって利他が媒介されるということです。利他学会議ではみなさんと一緒に身の回りにある多様な利他を具体的に考えてみたいです。



多久和 理実 講師、科学史

未来の人類研究センターの一員に加わって一年が経ちました。この一年間、将来歴史を構成するような記録を未来に残す活動の利他性について考えてきました。センターの存在自体が「利他が生じる場」そのものであるという二重性に助けられて、センターの提供で新規科目「東工大のキャンパスに親しむ」を開講したり、博物館・資料館と協働したりする機会を得ました。利他学会議が、成果発表の場であり、かつ、協力してくださった方々への恩返しになるといいなと思っています。



Recent news

センターからの近況お知らせ

2022.04-2023.03

1 センターのメンバーによる利他本

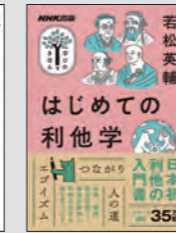
〈新刊〉



『ぼけと利他』(ミシマ社)
伊藤亜紗、村瀬孝生著
2022年9月15日発売 2640円

宅老所よりあいの施設長・村瀬孝生さんと伊藤亜紗さんの往復書簡。ぼけは、病気ではない、自分と社会を開くトリガーだ――

〈既刊本〉



2 オンラインジャーナル『COMMONS』

未来の人類研究センターが発行するオンラインジャーナル。第1号の特集は「利他」、第2号の特集は「余白」。



第2号には、長谷川晶一さんと北村匡平さんの対談「メタバースとバーチャルリアリティの現在」、広瀬茂久さんと多久和理実さんの対談「資料館の役割——繋がるための仕掛けとしての「余白」であること」も収録されています。

3 「モノから考える利他」プロジェクト

センターのメンバー全員参加の、エッセイとラジオから成るプロジェクト。毎回各自がひとつのモノをとりあげ、それにもつわる利他について考察します。



4 ナトゥーラ・ウルバーナ

2022年6月9日に、英国ケンブリッジ大学のマシュー・ガンディー教授をお招きして、映画「ナトゥーラ・ウルバーナ(都市の自然)」のオンライン上映会および講演会を行いました。



5 みんなで作る東工大の「新・キャンパスマップ」

センターの提供科目「横断科目：東工大のキャンパスに親しむ」では、受講生がそれぞれの視点で東工大のキャンパスを紹介し、それを集めて記録を未来に残すための「新・キャンパスマップ」を作製しました。「新・キャンパスマップ」は、利他学会議当日にちやぶ台トークの会場で展示します。



寄附のお願い

「利他プロジェクト」に対するご支援のお願い

https://www.fhrc.ila.titech.ac.jp/for_companies/

未来の人類研究センターでは、ひきつづき「利他」をテーマにかかげ、理工系の最先端の研究と歩調を合わせながら、数十年、数百年先の人類を見据えた人類のあり方を模索していきます。私たちの「利他プロジェクト」に共感してくださるみなさまの、あたたかい寄附をお待ちしております。インターネット基金もご利用可能です。詳細は未来の人類センターのホームページをご覧ください。

